備える 3.11から

第199回 私設の自主避難所

つなぐ安心 地域の拠点

女性や子どものニーズに寄り添った私設の「自主避難所」づくりを愛知、三重両県の子育て支援団体などが進めている。支援団体が設けた普段の交流場所を使うため、不安な災害時に安心して身を寄せられる利点がある。市町村が開設する指定避難所と行き来してもらい、授乳場所や子どもの遊び場として提供したい考えだ。（出口有紀）

女性や子どもに寄り添う

愛知県犬山市にある住宅街の一角。二階建て民家の庭には、かまどや石窯があった。「災害時も電気を使わずに炊き出しができます」。同市のNPO法人「こどもサポートクラブ東海」理事長の三輪宮子さんが説明してくれた。

保育士の資格がある三輪さんは、名古屋市への転居を機に、自宅だったこの民家を子育て支援の居場所「みんなのお家（うち）　ひなたぼっこ」として二〇一九年に開放した。普段は発達障害の子どもと親が集まり、一緒に遊んだり、情報交換したりしている。住民と石窯ピザを焼く催しも開く。

災害時に自主避難所として使おうと決めたのは、名古屋市の一般社団法人「こども女性ネット東海」代表理事で知人の藤岡喜美子さん（六七）から提案を受け、趣旨に賛同したためだ。

藤岡さんは一六年の熊本地震時、子どもや女性の支援に関わったが、多くの被災者を受け入れる指定避難所では、個別のニーズに対応するのは難しいと痛感。東海三県で子育て支援などに取り組む人らと二〇年に同法人を設立し、子どもや女性の支援を担う自主避難所づくりを提案してきた。

当初は「自主避難所では各種の災害に対応しきれない」と反対の声も少なくなかった。しかし、コロナ禍で指定避難所の「密」が新たな課題となり、風向きが変わった。自宅にとどまる在宅避難や、親類宅などへの分散避難も推奨され、指定避難所だけではない考え方が出てきた。

今年二月、藤岡さんがあらためて自主避難所の開設を各団体に持ち掛けると、こどもサポートクラブ東海を含む愛知、三重両県の十二団体が十六カ所で開設する意思を示した。

「みんなのお家　ひなたぼっこ」の庭に置いたかまどの使い方を藤岡喜美子さん（左）に説明する三輪宮子さん＝愛知県犬山市で

授乳場所、遊び場として提供

その一つ、障害者施設を運営する一般社団法人「あすなろ」は、愛知県岡崎市で地域住民らの居場所「遊び庵ポレポレ」を運営している。喫茶店だった建物を居場所にし、二〇年には約百平方㍍の部屋に板敷きのスペースもつくった。

普段は子育て中の親子と、施設で働く障害者との交流の場になっている。災害時は指定避難所や自宅から休憩に来てもらうことを想定。法人職員の猪飼由美子さん（六二）は「三食の提供や寝泊まりは難しい」としつつ、「『完璧にしよう』と構えず、その時にやれることをやり、困っている人を助けられたら」と話す。

子育て支援に取り組む同県武豊町のNPO法人「スマイリードリーム」も、妊婦や育児中の女性が休憩や授乳に活用できるよう、災害時に活動拠点の家屋を開放する。理事長で武豊町議の桜井雅美さん（五一）は「私たちが指定避難所に出掛け、支援が必要そうな人に声掛けしたい」と思い描く。

こども女性ネット東海は十二団体でネットワークをつくり、自主避難所として使う建物の安全性を確認したり、備蓄を進めたりする方針。交流サイト（SNS）などに場所や支援内容の情報を載せ、支援物資を受け取ったり、保育士や助産師らの助けを得たりする仕組みも整えたいという。

藤岡さんは自主避難所について「普段からの地域とのつながりが一番の力。それぞれの団体ができることを考える」と説明。ほかの団体も開設に「手を挙げてほしい」と話している。

「遊び庵ポレポレ」の板張りスペースに座り「床に断熱材を入れたので、冬でも底冷えする感じはない」と話す猪飼由美子さん＝愛知県岡崎市で

熊本地震であり方 課題

二〇一六年の熊本地震では、市町村が学校の体育館や公民館に設置する指定避難所のあり方が課題になった。子どもがほかの人に迷惑を掛けることを恐れたり、更衣室や授乳室がなかったりして、車中泊する人も多かったためだ。一方で、民間の保育園や大学が自主的に避難所を開き、親子や近隣住民らを受け入れたケースもあった。

東洋英和女学院大（横浜市）の塩崎美穂准教授（保育学）は、熊本地震の時、現地の保育園を巡った。自主避難所を開設した保育園には、一つの特徴があることに気付いた。「さまざまな行事を通して普段から地域住民と顔が見える関係を築き、保護者の信頼も厚かった」という。

保育園の施設を避難所として使うには、保護者の理解が欠かせない。このため、自主避難所を開設するには「日頃から質の高い活動をすること」が鍵とみる。保育園であれば、地域住民も交えた子育て支援の場をつくることなどを挙げる。

その上で、災害時は「臨機応変に判断し、自分ごととして考えることが大切」と指摘。自主避難所の開設に当たっては、子育て支援なら地域の保育士との協力を模索するなど「どこと連携すれば効果的なのか、考えて準備をしないといけない」と話す。

災Seeing さいとシーイング

名古屋大学減災連携研究センター　CBCテレビ　中日新聞　一般社団法人中部地域づくり協会

土地の歴史や成り立ち 知ること大事

▼14▲

七里の渡し（名古屋市熱田区）

常夜灯などが復元された「七里の渡し」について語る名古屋大の平井敬助教＝いずれも名古屋市熱田区で

名古屋市熱田区の「宮の渡し公園」にはかつて、東海道五十三次で最大規模の宿場町「宮宿」があった。東海道で四十一番目の宿場町だ。次の桑名宿（三重県桑名市）に行くため、人々はここから船で海路を渡った。

「東海道唯一の海路でしたが、そうなった理由は地形にあります」。名古屋大減災連携研究センターの平井敬助教（地震学）が教えてくれた。「ここから西の濃尾平野は海抜ゼロメートル地帯。たびたび洪水や高潮が起こり、地盤も緩く、陸路は難しかったのでしょう」

ここは桑名宿までの距離が七里（約二十八㌔）だったことから、「七里の渡し」とも呼ばれる名所だった。復元された常夜灯や船着き場が往時の趣を伝える。一方で、公園内には一九五九年の伊勢湾台風の被害を解説した説明板もある。その隣には、伊勢湾台風時に付近一帯で最高二・五㍍の浸水があったことを示すポールが立ち、水害に警鐘を鳴らしている。

そこから北へ数分歩くと、熱田神宮の一番南にある正門に着く。南側の道路を見ると、地面が緩やかに下っているのが分かる。「熱田神宮のある場所は、熱田台地の南の端にあたるんです」と平井助教。

宮の渡し公園にある伊勢湾台風の説明板と、最高浸水位を示すポール

熱田台地の上に立っている熱田神宮の本宮

熱田台地は標高が少し高いだけでなく、地盤も比較的固い。平井助教によると、一八五四年の安政東海地震では熱田神宮の境内に大きな被害はなく、周りの人々が避難してきたという記録が残る。

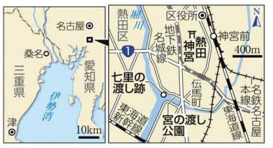
宮宿をモチーフにした歌川広重の浮世絵を見ると、宮の渡し公園付近にかつてあった熱田神宮の「浜鳥居」の間近に、海が描かれている。現在は干拓などが進み陸地が広がる。平井助教は、こうした海抜ゼロメートル地帯について「地盤が軟弱で、地震による揺れも増幅する傾向がある」と指摘する。

「それぞれの土地の歴史や地形の成り立ちを知ることが大事。それがその土地の危険度を知り、災害への備えを考えることにつながる」と話した。（横井武昭）

CBCテレビによる動画はこちら

宮の渡し公園　名古屋市熱田区内田町。地下鉄名城線「伝馬町」駅下車、徒歩8分。

熱田神宮　名古屋市熱田区神宮1の1の1。名鉄「神宮前」駅下車、徒歩3分。創建は113年。三種の神器の一つ、草薙神剣（くさなぎのみつるぎ）をまつっている。



二百回目となる次回の「備える」は、六月六、七日に掲載する予定です。

(c).中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています